

【第1チーム】FD合宿セミナープログラム及び記録

(1) プログラム抜粋

FD合宿セミナーに当たって

学士課程教育の充実のためには、第一義的には各学部がその責任を負っていますが、学部の専門を超えた幅広い学びのあり方や授業の改善、学生の主体的な学習支援などは、学部の垣根を超えて全学的に取り組まねばならない課題です。また、生き残りをかけた大学改革に際し、授業の充実が最も重要な課題の一つでしょう。

今回のセミナーの第一の目的は、「個々の教員が、大学を支えることの意義と位置付け、教育の基本的構成要素、各授業科目の存在意義、授業設計、成績評価法などについて、あたらめて主体的に検討し、再構築していただくこと」です。この目的を達成するために、まず、参加者の皆様に御担当いただく新しい授業科目について考えていただきます。そして、そのシラバスをグループで協力して作成していただきます。こうした一連の作業が有効な方法であることは、既に広く知られています。

セミナーは、大学への参画意識を高めるための2つのプログラムと、シラバスを作成するための2つのプログラムから構成されています。各プログラムは、グループ作業を中心に組み立てられており、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

また、「大学間・学部間の人的交流の拡大・充実を図ること」が第二の目的です。他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後は、参加者が大学の教育分野全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナーは、「構成員こそが大学の財産」という精神でのぞんでいます。

更に、このセミナーは東日本地域の「FDネットワーク“つばさ”」を始めとして、全国の大学に開かれています。本セミナーが、相互研鑽の精神に則り、参加された大学・短大・高専の発展に寄与されることを願っております。



第11回 山形大学FD合宿セミナー日程表

期 間 第1チーム：8月29日（月）～30日（火）

○第1日目

時 刻	項 目	担 当	参照ページ
12:45	JR山形駅西口集合・受付	事 務	
13:00	送迎バス 大学出発		
14:00	会場到着 セミナー開会 開会のあいさつ	司会： DR-A	
14:30	アイスブレーキング	DR-A	
14:50	オリエンテーション	DR-A	P. 7 参照
15:00～16:30	プログラムⅠ「大学へのニーズと課題」	DR-A	P. 10参照
16:30～16:40	休憩（10分間）		
16:40～18:10	プログラムⅡ「理想の大学をつくる」	DR-A	P. 12参照
18:10～19:00	夕食		
19:00～20:00	入浴・休憩		
20:00～22:00	懇親会	DR-B	
22:00	中締め		
23:00	就寝		

○第2日目

時 刻	項 目	担 当	参照ページ
7:30～	朝食・部屋退出		
8:30～10:00	プログラムⅢ「科目設計1：授業名と目標、内容の作成」	DR-B	P. 14参照
10:00～10:10	休憩（10分間）		
10:10～11:40	プログラムⅣ「科目設計2：シラバスの完成」	DR-B	P. 18参照
11:40～	修了式	DR-B	
12:20～	昼食		
14:30	送迎バス 蔵王山寮出発		
16:00頃	大学到着 解散		

【留意事項】

- セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。
- セミナー期間中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。
- 食事はセルフサービスとなります。食事時間になりましたら、共同で配膳作業等を行ってください。
- 起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓し、使用した宿泊室・廊下等を清掃してください。
- 退出の際は、使用したシーツ・枕カバーをたたんで、指定する場所に返却してください。

8月29日～30日 第1千一ム

DR-A	小田 隆治
DR-B	杉原 真晃

A班	氏名	性別
山地	渡部 泰山	男
山工	多田 十兵衛	男
青公	丹野 大	男
長造	平山 育男	男
秋田	櫻井 健二	男
石巻	田村 真介	男

B班	氏名	性別
山人	岩田 浩太郎	男
山農	藤科 智海	男
武道	清水 宣雄	男
明星	高 三徳	男
文教	永盛 善博	男
長野	小高 康正	男

C班	氏名	性別
山理	松田 浩	男
愛工	四俵 正俊	男
聖隷	矢倉 千昭	男
一関	谷林 慧	男
仙台	庄子 幸恵	女

D班	氏名	性別
山理	井深 章子	女
山工	鳴海 敦	男
近畿	本村 元造	男
福島	山田 貴浩	男
長技	山本 寛	男

E班	氏名	性別
山EM	平尾 清	男
長技	福本 一朗	男
羽陽	松田 知明	男
聖隷	成松 美枝	女
東文	小淵 高志	男

F班	氏名	性別
山地	出口 毅	男
近畿	井面 信行	男
岐阜	出路 静彦	男
八戸	小川 あゆみ	女
東文	鈴木 誠	男

山人:山形大学人文学部 山地:山形大学地域教育文化学部 山理:山形大学理学部
 山工:山形大学工学部 山農:山形大学農学部 山EM:山形大学エンロールメント・マネジメント部
 明星:いわき明星大学 仙台:仙台大学 八短:八戸短期大学 岐阜:岐阜医療科学大学
 東文:東北文教大学 青森:青森公立大学 秋田:秋田県立大学 武道:国際武道大学
 愛工:愛知工業大学 一関:一関工業高等専門学校 近畿:近畿大学 長造:長岡造形大学
 長技:長岡技術科学大学 福島:福島工業高等専門学校 羽陽:羽陽学園短期大学
 東文:東北文化学園大学 聖隷:聖隷クリストファー大学 岐阜:岐阜医療科学大学
 石巻:石巻専修大学 長野:長野大学

オリエンテーション

1 FDの必要性

- ① 大学の社会的教育責務の明確化
- ② 大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革
- ③ 大学生の質の変化への対応

2 合宿セミナーの目的

- ① 教員個人が大学を支えること的位置付け
- ② 教育の基本的構成要素，大学における各科目の存在意義，授業設計，成績評価法などをあらためて整理する。
- ③ 教員相互の交流

3 セミナー形態

体験型のセミナーで，セミナー自体がグループ学習形式であり，参加者は，学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② セミナーのグループ構成：6班
班の構成員の年齢は幅広くする。
- ③ 各プログラムに，毎回，総合司会者と記録係を置く。（各班の持ち回り）
- ④ 各班に，毎回，司会者と記録係，発表者を置く。（持ち回り）
- ⑤ 全体と各班の記録係は，各プログラム終了後に記録を提出（この記録は，コピーした後，速やかに全班に配付）
- ⑥ 参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で，各参加者が各班の発表と質疑応答に対し，5段階で評価を与える。（この評価は，毎回回収し，整理した後，速やかに掲示する。）
- ⑦ 合宿セミナーに関するポストアンケートを実施

4 各プログラムの基本的形態

- | | |
|----------------------|---------|
| ○各プログラムの講師による作業内容の説明 | 10分 |
| ○グループ作業 | 40分 |
| ○発表 各グループ | 24分 |
| （各グループの発表時間4分×6班） | |
| ○全体討論 | 16分 |
| | 全体で 90分 |

プログラムⅠ「大学へのニーズと課題」

- 各班同じテーマ プログラムⅡも念頭に置く。
現実的，具体的に解析する。

- 1 大学には何が求められているか？
 - ・社会は大学に何を求めているか？
 - ・学生のニーズ
- 2 大学の置かれている状況分析
 - ・そこには，どのような課題（問題）があるか？
 - ・長所（望まれていること）
 - ・短所（望まれていること）
 - ・その生じさせている理由・原因は何か？
- 3 現実的な制約・問題点，改革の必要性など

プログラムⅡ「理想の大学をつくる」

プログラムⅠの問題点などを踏まえた上で、理想の大学をつくるためには、これからどのようなことを考え、実行していかねばならないか、具体的に提案する。大学の理念・目標を実現するための具体的な行動目標、大学の「個性」と「売り」をどのようにするか。すべての班が同じテーマであるが、個性あふれる現実的企画を期待する。

大学の「売り」を作る企画が求められている。

- 1 大学の理念・目標
 - ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
 - ・個性的な大学像（理念・目標，キャッチフレーズ）
- 2 方略（考えられるいくつかの方法，実現の可能性）
- 3 実行計画（主な活動，資源，時期，担当，責任，具体的企画書など）
 - ・その宣伝・普及の方法（4年計画案）
 - ・組織論（学部，学生の入口と出口（入試制度と就職），学長と副学長制，委員会など）
- 4 評価（測定方法，学生，教員，ステークホルダー）
 - ・目標が達成できたかどうかを検証する

プログラムⅢ「科目設計1：授業名と目標，内容の作成」

ここでの課題

シラバス作成作業の第1段階として、各グループごとの課題に対応した授業名と学習目標の設定を行う。

プログラムⅢ，Ⅳの各グループの課題

- A，B班：大学の個性を発揮する授業
- C班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携
- D班：国際性を培う授業
- E班：21世紀の諸課題に対応する授業
- F班：職業意識と労働意欲を培う授業

学習方法と道筋（戦略，学習方略）を明示する。具体的には、学習者が到達目標に達するために必要な学習方法の、種類と順序を示す。

作業1 授業名の決定：○○○○○○○○○○（仮称）←内容確定後，最後に決定？

作業2 学習目標の設定

- 1 踏まえておくべきことから：
 - (1) 教員中心ではなく，学生による学習を中心に考える（教員の果たすべき役割の再検討）
 - (2) 大学に対する社会的ニーズ
 - (3) 大学の全体的な教育目標註：(1)について
 - 大学の役割
 - 講義の提供 → 学習方法と教育方法のデザイナー
 - 学生から独立 → 教員と学生を一つのチームと考える
 - 学力差を明確にする → すべての学生の能力と才能を引き出す
 - 成功へ向けて
 - 伝授する資源の重視 → 学習と学生の成功の産物を重視
 - 資源の量と質の重視 → 産物の量と質を重視
 - 入学生の質の重視 → 卒業生の質を重視
 - カリキュラムの発展と拡大 → 学習技法の発展と拡大

大学の質・内容の質	→	学生の学習の質
使命		
知識の提供・伝授	→	学習を生み出し、知識の発見と形成へ
コース・プログラムの提供	→	強力な学習環境の提供
教育の質の改善	→	学習の質の改善
多様な学生への対応	→	多様な学生を卒業させる
教育		
教員中心・知識伝授	→	学生中心・知識発見
教育の質	→	学習の質、学習効果・効率
指導者としての教員	→	学生の才能・能力を引き出す助言者
個人的・受動的学習	→	共同的・行動的・能動的学習

2 学習目標の記述

各科目の学習目標を表現することの必要性とその表現方法を学ぶ。学習の効果は、教育の受け手（学習の主体）である学生の変容で評価されるべきである。そのために、①授業の目標と②到達目標を定める。

註：授業の目標を作成する際の注意点

原則

- (1) 学習者を主語として書く
- (2) 学習の結果、いかなることができるようになるかを明示する

記述内容

- (1) 知識・技能の学習がなぜ重要か。それによって学生の要求がどのように満たされるかを明示する。
- (2) 複雑・総括的な概念を持つ動詞を用いる。
知る、認識する、理解する、感ずる、判断する、評価する、考察する、位置付ける、実施する、適用する、示す、創造する、身に付ける、等々
※単純な行動を示す動詞は用いない（述べる、列挙する、選ぶ、記載する等々）
- (3) 必要な目標分類（認知・態度・技能）を総括的に含める。

註：到達目標を作成する際の注意点

授業の目標を達成するためにどのようなことができるとよいか、具体的に明示する。

- (1) 学習者を主語として書く
- (2) 動詞を含むこと
- (3) 「理解する」のような概念的言葉ではなく、観察可能な行動を具体的に表す
- (4) 授業の目標と関連していること
- (5) 到達レベルを書く
- (6) 認知、態度、技能を分けて書く
 - 知識（認知領域）：知識を得て理解し、一定の能力を獲得する
述べる、説明する、分類する、比較する、解釈する、推論する、一般化する、適用する、結論する、批判する、評価する、等々の動詞
 - 技能（精神運動領域）：知識・能力を活かして意識的・具体的に行動する
感ずる、始める、模倣する、工夫する、行う、創造する、触れる、調べる、準備する、測定する、等々の動詞
 - 態度・習慣（情意領域）：獲得した知識・能力を、情報として相互に提供・交換し合う
行う、コミュニケーションする、協調する、示す、表現する、系統立てる、参加する、応える、等々の動詞

作業3

原則として、週に1回90分の授業を15回実施するものとして、授業の内容を考えて

みる。その際、授業の順序と各回の内容、学習法、利用する媒体、資源などについて明示する。内容によっては、授業の目標、到達目標、さらには科目名についても変更が必要になるかもしれない。

註：学習方法の種類

- (1) 受動的学習法：講義など
- (2) 能動的学習法：①グループ討議（演習，セミナー，ディベートなど）
 - ②実験・実習
 - ③自習（読書，個人研究，コンピュータ活用学習など）

註：学習のための資源

- (1) 人的な面で：
- (2) 物的な面で：①場所
 - ②媒体（スライド，OHP，標本，VTRなど）
- (3) 予算

プログラムⅣ「科目設計2：シラバスの完成」

ここでの課題

プログラムⅢで作成した授業について，シラバスを完成する。

○成績評価

その位置付け

- (1) 教育評価は，学生，教員，カリキュラム（目標，学習方法の立案（方略），評価）の三者が対象
- (2) 成績評価は，その中の一つ。

留意点

- (1) どの行動領域を評価するか
 - ① 知識（認知領域）
 - ② 技能（精神運動領域）
 - ③ 態度・習慣（情意領域）
- (2) いつ評価するか
 - ① 学習前（プレテスト）
 - ② 学習中（中間テスト）
 - ③ 学習終了後（ポストテスト）
 - ④ フォローアップ・テスト
- (3) 評価の目的
 - ① 形成的評価：学生が理解している点，理解が不足している点を発見し，学習法，教授法へのフィードバックが目的。最終評価の参考にしない。
 - ② 総合評価：到達目標に対する学生の到達度を計測する。
- (4) いかに評価するか，複数の評価項目のウェイト
 - ① 論述試験
 - ② 口頭試験
 - ③ 客観試験
 - ④ 実地試験
 - ⑤ 観察試験
 - ⑥ 論文（レポート）

評価の持つべき性格

- (1) 妥当性：計測しようと意図する項目を計測できる方法か？
- (2) 信頼性：計測結果の再現性は良いか？
- (3) 客観性：計測者（教員）が替わっても，同じ結果が得られるか？
- (4) 効率性：経済的にも時間的にも実用的か？
- (5) 特異性：なぜ，そういう解答がなされたか分かるか？

プログラム I 記録 「大学へのニーズと課題」

A 飯班 (A 班)

司会者：丹野、
記録者：平山
発表者：丹野

丹野：学生は地元就職したい ← ニーズに応えられない

そのため教員が勝手にプログラム作成

さらに乖離

根本的には経済振興が必要

地域からの期待 → 産業との連携

内村：地域振興が望まれる

現実的な制約がある

多田：ニーズ、地元就職

渡部：大学、県民にとって？ 知的財産

学びあう、教えあう

小結

大学は知の宝庫

住民がそれを利用する ⇒ ルーツ①

⇒地域振興

学生は

学問 ⇒ ルーツ②

転職

さくらんぼ班 (B 班)

司会者：小高
記録者：永盛
発表者：清水

①大学に求められること

- ・地域、親、企業が求める人材を作ること。
- ・地域に教員が入り、地域に貢献していく。
- ・知の創造。地域では気づかない、思いつきもしない知作り出す。

②状況分析

- ・学生が自分で考える力が身についておらず、最短距離で答えを求める。そのような学生に社会に出てから役立つ能力、想像力を育てるのは難しい。

③現実的制約

- ・マニュアル化することである程度の能力は育成できる。一方で想像力は育たないかかもしれない。考える力をつけられるような、しかし、その他の実際の動きができるマニュアルを作る必要がある。震災時のディズニーランドのバイトの対応が参考になる。
- ・定員の確保（経営的側面）。そのためには、地域、親、企業の求める人材の育成が可能となる教育が必要。しかしそうすると創造的研究、想像力の育成が困難になる。

SEE班 (C班)

司会者：四俵

記録者：庄子

発表者：庄子

1 大学には何が求められているか

・ 社会は大学に何を求めているのか

①就職がきちんとできるように → 保護者の期待

②企業から何を求められているか → 企業からの期待

③きちんと進路を次の進路を決めてほしい

すぐに使える即戦力のある人間

J A B E E → 自分たちの教育を審査する制度 (工学部)

・ 学生のニーズ。アカデミックな要求は少ない

現実的な就職希望↑ 資格 (教員) をきちんととりたい

2 大学が置かれている状況分析

・ 学生が勉強をするものだという認識がない。

→勉強に関心がなく、アルバイト等に熱心になっている

・ 言われたことしか学生が勉強しない

自主的にクリエイティブに創造していく力が少ない

→体験学習・実習とのタイアップをはかる

実際に体験して身につけさせる

大学と地域 → 周りとの関係性の中で、どう学生を育てていくか

ex) インターンシップ制度

社会資本の活用

・ アカデミックな世界で生きていくのは厳しい。教員の枠も少なくてなかなかない。

・ もともと大学は、社会の実践力は求められずにアカデミックな世界であった

・ 学生の能力にあわせて、アカデミックな部分も維持していかないといけない

→社会がそうはさせない状況がある

3 (1) 社会：就職できる人材・即戦力のある人材

考えない高校の教育 → 受験対応のみになっている

(2) 経営：学生の確保 独立行政法人になってどんどん制約がきつくなってきた。

学校数が多すぎる

どんまい班 (D班)

司会者：鳴海
記録者：本村
発表者：山本

- 1 求められているもの
 - ・教育・研究・地域貢献の拠点
 - ・問題解決能力を身につけた学生を育てる
 - ・保護者、企業からの期待がなくなっている学生のニーズ $\left\{ \begin{array}{l} \cdot \text{専門性を身につける} \\ \cdot \text{就職に有利になる} \\ \cdot \text{学生のニーズがぼけている} \end{array} \right.$
- 2
 - ・課題=大学に入る事が目標で勉強欲が乏しい
 - ・長所：自主的な活動（実験、卒研）
 - ・短所：基礎能力の不足 → リメディアル教育
主体性のない学生増加の実践
原因・高校までの受験重視教育のマイナス
- 3 卒研レベルに学生を育てるための1、2年次
 - ・改革の必要性：・社会（企業）の要求
 - ・学令体制の問題1、2年生までの段階が重要 = ゼミナールの充実

ミルクィーウェイ (E班)

司会者：
記録者：
発表者：

- 1 大学には何が求められているか
 - ①社会に役立つ人材の育成：アイデアを提出 ・高等職業教育
 - ②教養：論語 ・地理、歴史、外国語
「専門教育とリベラル・アーツ」両方が重要！
- 2 状況分析
 - ①大学の自治権が発揮できない
法人（理事会）の圧力、ガバナンスの問題、教授会の無力化
 - ②大学もニーズリサーチが足りない（象牙の塔？）
求めているものを把握できない
 - ③学生：教養（人間性の深み）が足りない、判断力の欠如！
- 3 現実的な制約・改革
 - ①卒業生にリサーチして（大学教育）評価を聴く
 - ②卒業生の就業状態 フィードバックの必要性
 - ③リベラルアーツ（教養）も必要
倫理学習得（内面的幸福！！）
 - ④学問の自由：教育の自由をイノベーションのために理事会に屈しない 日本国憲法 § 23
変わらない大学も大事！！

チーム・ボルト班（F班）

司会者：小野木

記録者：門叶

発表者：矢崎

- 1 ①即戦力としての人材育成
②地域貢献
③学生への個人指導
- 2 4年間の間に学生のレベルをあげ、しかも即戦力としての人材を育成することの困難
- 3 教職員の負担増
自分で考え行動する学生の育成
1年生からゼミを行なうこと

◇グループ作業記録 プログラム I 全体討議記録

A A飯 大学は知の宝庫

- ・住民がそれを利用／地域貢献
- ・学生：学問、転職
教育／学問を地域へ開く 充分ではない

B さくらんぼ

求められること：地域の拠点、転職に強い、社会人としての自立、転職後の力
マニュアルにない、マニュアルの模索が必要

C SEE

保護者：社会人として 資格
企業：即戦力の育成
アカデミックな要素が少なくなっている
地域との連携 → インターンシップなど

D どんまい

求められること：人材育成、教育
現状：大学自活×、深みがない
改善：学問の自由の必要性

F チーム・ボルト

求められること：想像力の欠如←ゼミ←改革

共通点 大学は知の拠点

リベラルアーツ→問題解決力が社会・学生から求められている

未来からの視点も必要

プログラムⅡ記録「理想の大学をつくる」

A 飯班（A 班）

司会者：田村

記録者：渡部

発表者：田村

<理想の大学>

知的信用のある大学であること。そのためには信頼される大学人の存在。

大学人が自らの研究に対する社会性の自覚が必要である。

「あなたの興味、関心が大学の学問に」

キャッチフレーズ

→楽しい、おもしろいということのうちに基礎学問研究の原点がある。

資格の取得という実学アピールだけで良いのか、それも大切であるが、ある問題に対する解決力、生きていくベースになっていくものでありなっていくものであり（人間力・知的好奇心）などの力、すなわちリベラルアーツの重要性を知の拠点として無視できない。

<方略>

学問枠組みの中で、社会的ニーズの中で学問にしていく楽しみ喜びが生まれる。

<実行計画>

サクセスストーリーの作成、その露出が必要、ローカルな人間でも良い。

しかし、実際いないという難しさもある。

学生生活の改善 奨学金制度

<評価>

教育目標も重要であるが、新しい教育活動にふさわしい評価の視点が重要である

教員自身が行動的なおもしろさが必要である。

さくらんぼ班（B 班）

司会者：岩田、記録者：高

発表者：藤科

●大学の理念・目標

社会に貢献できる大学、社会・地域・学生・保護者に感謝される大学を目指して

●方略（大学のあり方、教員指導法）

全寮制：24時間対応

- ・教員にさらなる自由度を持たせる（講義時間の自由化向上）
- ・学生に創造性を付ける。このためPBL（課題を基づいた学習）を通して創造力を養う。
学習内容により学習方法の伝授や学習興味・意欲を引き出すのが重要。興味・応用から教を出展。このような体験教育のための予算確保必要である。
- ・地域との連携で人間関係（信頼関係）作りが必要。地位の知恵・資源（“地位力”という）を生かして、特別ゼミなどの形で、身近で現実的なことを学ぶ。
- ・ゼミ・卒研を重視し、専門知識だけでなく、人間関係、協力関係も学ぶ
- ・教員の連携、チームティーチング

●実行計画（組織）

- ・学部は基本だが、全学協力、地域に拡大される
- ・全寮制、24時間対応、ローテーション、先生・地域が授業。プロジェクト提案—ボトムアップ

●評価：教員同士の評価（模擬講義等を通して）教育・研究の業績の定量化の動きもある

SEE班 (C班)

司会者：庄子
記録者：松田
発表者：矢倉

- 1 電機 — 実践的 技術者養成 創造的
体育 — 全ての人のためのスポーツを
プロテスタント — 隣人愛

選択出来る、転学部、転学科できる 卒業してからも戻って 社会人になってから 勉強する必要を感じてから	勉強ができる	大学
---	--------	----

トップレベル知識の教育

大学で勉強することの大変さ、覚悟

- 2 高卒 → 公務員 → 大学夜間 → ステップアップ
会社を辞めずに
仕事を続けながら
通信教育、単位相互) 大学に戻る
サテライトキャンパス — 設置場所
企業の理解 非常勤講師 職歴を作る
- 3 大学の連携
各大学が「単位パッケージ」を出したら、単位の有効期限を無期限にする
- 4 資格、単位、学位

どんまい班 (D班)

司会者：本村、記録者：山本
発表者：山田

- 1 理想・目標
「複合分野をリンクさせる大学」
 - ・大学の個性を高めるために、大学全体が共通した目標を持つ
- 2 方略
 - ・一部の教員から「小さなネットワーク」を作り大きな流れにしている。
 - ・大学に必要なレベルアーツも特徴づける
 - ・経営側からの評価
- 3
 - ・1・2年計画で、本来必要とされる学生の資質に育て上げる
 - ・適切な人数配置 → 有機的にリンクさせる
↑ (事務の方と分担など)
分野に応じた
 - ・組織的な授業・研究・研究費の獲得等
- 4 評価
 - ・企業・大学内(教員・学生)など、色々な声を集計する(アンケートなどで情報を集める)
 - ・卒業生や企業の声が役立つ(卒業生の「〇〇の点が良かった」など)

ミルクウェイ班 (E班)

1 大学の理念・目標

- ・自由と自立

自主・独立・自由

「学生と共に運営する大学」

(親(保証人)のニーズに応えつつも)

- ・学問：国際競争力の向上

2 方略

- ・学生の事務・運営への関与(職業教育の場に)
- ・学生のカリキュラム運営への関与
責任行動のとれる学生の育成

センター試験と面接による入試

3 実行計画

- ・インターンシップの活性化
- ・入試試験を就職試験にして意欲の高い入学生を確保

4 評価

学生に「卒業した後」の評価を

チーム・ボルト班 (F班)

司会者：小川、記録者：鈴木
発表者：出口

1 どんな大学にしたいか

キャッチフレーズ 「つながりを実感できる大学」～〇〇大学に〇〇村を作ろう～

- ・地域、教員－学生間、学生間、海外とのつながりが見える大学
- ・大学からの一方的ではなく、関係する領域と双方向性を持たせる大学

2 方略

大学で実現可能な(教員の排出可能な)“村”を作る

例：芸術村 → 芸術活動を中心に実施

子供村 → 子供の一時預かり、遊び場の提供、子供向けイベントなど

※資金をどうするか…スポンサー → 学生の就職先としても有効

3 実行計画

- ・組織論 〇〇村の組織運営
 - ・村長 — 大学教員 ・村役場職員 — 教員と学生
 - ・村民 — 教員、学生、地域住民 ・村会議 — 教員、学生、地域住民の各代表
- ・宣伝 村のホームページを大学のトップページにはりつける

4 評価

- ・地域住民の利用者数
- ・関係学生の満足度

◇グループ作業記録 プログラムⅡ 全体討議記録◇

今回の発表はプログラムⅠの点数の良かった順に行われた。

1. ミルキーウェイ班

- 1 (理想) 自由・自立・自主独立→「学生の運営する大学」
- 2 (方略) 学生の事務・運営への関与) 責任行動をとらせる
学生のカリキュラムへの関与)
インターンシップの活性化
入学試験…センター試験だけでなく、面接による
- 3 (実施) 就職の模擬的な試験を行う→意欲のある学生の確保
- 4 (評価) 学生によるアンケート (フィードバック)

2. どんまい班

- 1 (理想) 大学で共通の理想を形に。大学の個性に合わせて、マンモス授業、個別教育
→「複合分野をリンクさせる大学」
- 2 (方略) 教員の小さなネットワーク→大きなつながり (運営側の評価)
各大学にふさわしいリベラルアーツを。
- 3 (実施) 1～2年で基礎づくり→3～4年につなげる (卒業研究)
事務・教員の役割分担
- 4 (評価) いろいろな声を聞く (学生、卒業生、教員、企業など) →まとめる

3. A飯班

- 1 (理想) 知の楽しみ、おもしろさを教員が示す→「あなたの興味を学問に」
- 2 (方略) 学問の枠組み、社会のニーズの中で行う 知のベースを広げる
- 3 (実施) サクセスストーリーを作る→メディアに知らせ、宣伝する
- 4 (評価) 学生自身の自己評価 (4年間を通して) 評価法は模索中

4. SEE班

- 1 (理想) 「選択できる・戻ることができる大学」
転学部、学科、他大学へも。社会人大学院など専門資格、キャリアアップ
- 2 (方略) 年限、単位の組み合わせ (パッケージをつくる)
大学間の連携、放送大学の活用、サテライトを作る。

5. さくらんぼ班

- 1 (理想) 「社会の気付かない知を創造する大学」
- 2 (方略) ・創造性のある学生を育てる
・PBL (プログラム・ベースド・ラーニング)
・学生への動機付けは基礎からではなく、応用的なもの
・ゼミナール

- ・地域へ出ていく
- ・教員間の連携（研究：地域と、教育：協働でシラバスの作成、チームで授業を行う）
- ・ボトムアップによる

3（実施）・全寮制

- ・地域からのプロジェクト提案
- ・＜地域力＞の結集

6. チーム・ボルト班

1（理想）「つながりを実感できる大学」

- 2（方略）大学に〇〇村をつくろう ～英語村
芸術村
子ども村
健康村

3（実施）大学のHPを活用
村長などの役割を決める

4（評価）村の利用者数と満足度

【意見交換】（一部紹介）

- ミルキーウェイ班への質問：学生に経営（大学運営）に関与させることの危険性はないか
→試験でチェック。手当でも支払うので責任も生じる
- A飯班への質問：興味を持たない学士取得への対応は？
→教員が面白いことを示して学生に提案する
- チーム・ボルト班への質問：「〇〇村をつくる」時の教員と学生の役割分担は？
→単位認定をするのは教員の役割

プログラムⅢ記録 「科目設計1:授業名と目標,内容の作成」

A 飯班 (A 班)	司会者: 多田、記録者: 丹野 発表者: 多田																																								
<p>授業名: 冷蔵庫の向こう側 (冷蔵庫から自分と社会を見る)</p> <p>学習目標: 身近なものから社会を知る/見る/判断する</p> <p>到達目標: (1) 自分の存在を知る (2) 社会の事象を分析・判断する</p> <p>授業の展開</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%;">1</td> <td style="width: 45%;">今日の冷蔵庫の中身を報告</td> <td style="width: 10%;">11</td> <td style="width: 40%;">農場か工場か流通現場 (スーパーなど)</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>冷蔵庫のメカニズム (仕組)</td> <td>12</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>商品の流通 (物の値段)</td> <td>13</td> <td></td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>産業物 (加工品か原材料か)</td> <td>14</td> <td>発表 (発見を報告する)</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>食物アレルギー</td> <td>15</td> <td></td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>選ぶ → グループ学習</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>冷蔵庫の中身によってグループ分けをする</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>8</td> <td>それがどのように作られているのかを調べる</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>9</td> <td>科学的論文の書き方を指導する</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>実地調査/フィールドワーク (生産現場)</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>		1	今日の冷蔵庫の中身を報告	11	農場か工場か流通現場 (スーパーなど)	2	冷蔵庫のメカニズム (仕組)	12		3	商品の流通 (物の値段)	13		4	産業物 (加工品か原材料か)	14	発表 (発見を報告する)	5	食物アレルギー	15		6	選ぶ → グループ学習			7	冷蔵庫の中身によってグループ分けをする			8	それがどのように作られているのかを調べる			9	科学的論文の書き方を指導する			10	実地調査/フィールドワーク (生産現場)		
1	今日の冷蔵庫の中身を報告	11	農場か工場か流通現場 (スーパーなど)																																						
2	冷蔵庫のメカニズム (仕組)	12																																							
3	商品の流通 (物の値段)	13																																							
4	産業物 (加工品か原材料か)	14	発表 (発見を報告する)																																						
5	食物アレルギー	15																																							
6	選ぶ → グループ学習																																								
7	冷蔵庫の中身によってグループ分けをする																																								
8	それがどのように作られているのかを調べる																																								
9	科学的論文の書き方を指導する																																								
10	実地調査/フィールドワーク (生産現場)																																								

さくらんぼ班 (B 班)	司会者: 永森、記録者: 岩田 発表者: 小高
<p>◎大学の個性 「社会が気がつかない知の発見」「地域力をふまえた創造性」</p> <p>◎1 学年前期 教養で2単位 全学の学生が来ている 学年共通科目</p> <p style="padding-left: 20px;">課題を地域に行って捜していく <u>動機づけ</u></p> <p style="padding-left: 20px;">地域づくり 自校卒業生インタビュー、エネルギー。省エネ ボランティア実習</p> <p style="padding-left: 20px;">震災の現場 メモをとる 創造的</p> <p style="padding-left: 20px;">グループにわけて、課題発見の力、後半 調べて発表</p> <p>①現地の人とコミュニケーションできるか</p> <p>②いかに相手の気持ちを理解し立場に立てるか (<u>当事者力</u>)</p> <p>③授業内容</p> <p style="padding-left: 40px;">ガイダンス 1 コマ</p> <p>-----</p> <p style="padding-left: 40px;">1泊2日 4コマ分 現場 (地域) 合宿</p> <p>-----</p> <p style="padding-left: 40px;">課題発表 5 コマ</p> <p>-----</p> <p style="padding-left: 40px;">課題解決 5 コマ (発表 チーム別)</p> <p>◎授業名「創造的ボランティア実習」</p> <p style="padding-left: 20px;">◎授業目標 4年間の大学での学習の動機づけ。これ迄の価値観や知識では対応できない課題を捜し、課題を発見し、動機づけを得る。そして課題解決のための調査法を学ぶ</p>	

SEE班（C班）

司会者：松田、記録者：矢倉
発表者：谷林

地域性に関連する授業：大学と地域の連携

1 授業名：震災後における高齢者の介護予防

2 学習目標の設定

1) 授業の目標

- ・学生が日本の自然災害について理解し、災害状況にあった支援コーディネートできるようになる
- ・高齢者の特性について理解し、介護予防の指導とコーディネートができる
- ・被災者とコミュニケーションする能力を身につける。

どんまい班（D班）

司会者：山本、記録者：山田
発表者：井深

国際性を培う授業

○授業名 「国際交流演習」

○コンセプト

- ・日本人以外とのコミュニケーションをとられるように
- ・各国の文化・風土を調査 “国際理解”
(日本との違いを分からせる)
他の授業（語学）との連携を視野に入れて（前提）→語学を学ぶ意識を理解させる
- ・地域のボランティア（観光ガイドなど）→成果を発表
- ・外国で「交流したい」と思うように
- ・外国に観光で行くか仕事で行くかで異なる
→コミュニケーションをとらなければならないときに役立つようなもの
- ・地域にいる外国の方にゲストティーチャーとして来ていただく
→プレゼンテーションを聴いてもらってコメントをいただく
- ・ネットワークを広げるためのコミュニケーション（ビジネスも視野に入れて）
- ・リーダーシップを取って欲しいというメッセージを込めて

○学習目標

- ・各国の文化・風土・生活習慣等を理解し、外国で対等にコミュニケーションを取ることができるような能力を身につける
- ・自分が住む地域について文化等を整理して外国人に伝え、理解してもらえるようなコミュニケーション能力を身につける（外国と日本を比較しながら）

○授業の構成

- ①イントロダクション（文化の違い等の説明、ゲストを招いた講義）3週程度
- ②文化的な調査（自習〔グループで〕→プレゼン、学生・教員によるコメント）
- ③実践・実習（ボランティア等）、成果発表

ミルクウェイ班（E班）

作業1

震災後の21世紀パラダイム転換の提案

作業2

目標①学生は自ら問題を発見し、解決策を提案、実行し、評価できるようになる

②（1）問いを発すること

（2）守破離

（3）コミュニケーション・対話

ができるようになる

ソクラテス対話法

③自分の意見を客観視できるようになる

ヘーゲルの正反合止揚

作業3

- | | |
|----------|------------------|
| 1 問いかけ | 2 コマ |
| 2 守 | 2 コマ |
| 3 破 | 2 コマ ディベート |
| 4 離 | 2 コマ 地域・政府与党への提言 |
| 5 イベント企画 | 3 コマ |
| 6 評価 | 1 コマ |

チーム・ボルト班（F班）

司会者：井面、記録者：出路

発表者：小川

1 授業名 課題：職業意識と労働意欲を培う授業

「人間の心身の総理解」—化学療法を通して人間を知る—

学生数15名として、3名ずつで5グループに別けて実習、プレゼンテーションを設計する

2 学習目標の設定

「理学療法を通して人間の心と体の関係について深く理解する」

○到達目標

- 1 検査技術の取得
- 2 患者理解（疾患背景、生活、家族背景）
- 3 人間理解

3 学習方法の種類

- 1 講義（生理学、文学、芸術、死生観等）
- 2 実習（検査、測定法）3名×5グループ 15名
- 3 討論（測定上の判断基準の差別化）
- 4 プレゼンテーション
- 5 振り返り（総合評価）
（1年次、15名）

◇グループ作業記録 プログラムⅢ 全体討議記録◇

F 「人間の総理解」 1年次15名

—理学療法を通して人間の心と身体について[深く]理解する—

学習方法の種類①～⑤

リハビリ技術だけでなく、それを通して人間を理解する

E 「震災後の21世紀のパラダイム転換の提案」 1年生8班40名

・問いを発する ・コミュニケーションができるようになる

ソクラテス

ヘーゲル

震災をきっかけに幸せとは何かを考える

D 「国際交流演習」 1年前期5名×4グループ

・相手国を理解 ・対等にコミュニケーションできる ← 目標

・イントロ・調査・実践・発表 ← 授業内容

C 「震災後における高齢者の介護予防」 4、50名2～3年生

・自然災害の理解 ・支援をコーディネート

・高齢者の特性を理解 ・介護の実践 ・介護のコーディネート

・被災者とのコミュニケーションで必要なことを見つける

B 「創造的ボランティア実習」 1年前期20名（全員に取らせる）

・現場体験力 ・課題発見力 ・問題解決力 ← 学習目標

・コミュニケーション力 ・観察力 ・当事者力 ← 到達目標

・ガイダンス ・現場 ・授業 ・発表 今の自分の無力に気付く

A 「冷蔵庫の向こう側」 1年前期40名 5名×8グループ

身近なものから自分と社会のつながりを知る ←目標

・冷蔵庫から自分と社会を見る

・中身報告→流通、生産物、食物アレルギー

グループ学習、科学的…

調査フィールドワーク ・発表

ボランティアで学生がショックを受けた → これからの立ち直りも教育 ケアが大事

震災のトピックスが多かった → 社会に応える

プログラムⅣ記録 「科目設計2:シラバスの完成」

授業科目名 冷蔵庫から自分と社会をみる(A飯班(A班))

開講学年: 1年 開講学期: 前期 単位数: 2単位 開講形態:

【授業概要】

- テーマ
身近なものから自己と社会を見る、知る、判断する
- ねらい
冷蔵庫・中身を通じて、課題発見、探求能力を身につける。学問の枠組みの中で発表できるようになる
- 目標
社会・自己の問題を発見する
科学的レポートを作成・発表する
フィールドワークを通じ、生産／流通／消費の現場を体感する
- キーワード
自己・社会・流通・値段・生産・食物・アレルギー・コンビニ

【授業計画】

- 授業の方法
講義・調査。討論・レポート作成・発表(プレゼンテーション)
- 日程
 - 1 今日の冷蔵庫(ガイダンス)
 - 2～5 講義: 冷蔵庫の仕組み、商品の流通・値段、生産物、加工品、原材料、食物アレルギー
 - 6～8 1品選ぶ、グループ学習／発表、グループ内パーティ／冷蔵庫を開けて
 - 9 科学的論文の書き方
 - 10～11 調査・フィールドワーク: 生産現場・農場・工場・スーパー・コンビニ・レストラン・実家
 - 13～15 個人発表・討論: 自己・社会の問題発見

【学習の方法】

- 受講のあり方
身近なものを主体的に見つける
- 予習のあり方
新聞等、社会事象に目配せをする
- 復習のあり方
他グループの成果をよく観察する

【成績評価の方法】

- 成績評価基準
小レポート(前半・後半)、論理性
レポート、発表、問題の深まり
- 方法
グループ間での評価(学生間での評価)
レポート発表

授業科目名 君は大学で何を学ぶのか？
—創造的学習のために— (さくらんぼ班 (B班))

担当教員の所属：全学部教員

開講学年： 1 年 開講学期： 前期 単位数： 2 単位 開講形態：演習

開講対象： 全学1年 科目区分： 1クラス20名×教員数=1年生全員

【授業概要】

- テーマ
 - ・君は大学で何を学ぶのか
 - ・創造的学習をさせる
- ねらい
 - ・4年間の学習計画をつくる (初年度時教育の一貫)
 - ・コミュニケーション力、当事者力等その人の立場に立って考えられる力をつける
 - ・現場に出て、現実を見て、それを言語化する力をつける
 - ・大学での創造的な学習の方法を学ぶ (コミュニケーション力、当事者力、調査力、文章力など)

● 目標

<学習目標>

現場体験力、課題発見力、問題解決力をつけ、4年間の学習計画をつくる

● キーワード

創造的学習

【授業計画】

- 授業の方法
引率した教員がチューターとして、4年間の学習計画を立てさせ、4年間面倒をみる (人間力育成)
- 日程
 - 1回 ガイダンス、レポートの書き方
 - 2～5回 現場に出かける、合宿形式
 - 6～10回 グループ作業、課題発見
 - 11～13回 問題解決の提案
 - 14～15回 チーム別発表 (提案型) と討論

教員は枠組みづくり—再整理

【成績評価の方法】

- 成績評価基準
 - ・毎回のレポート
 - ・プレゼンテーション
- 方法
 - ・毎回のレポート提出を求め、添削、内容評価
 - ↑ ↑
 - 最初のうち 最後の方
 - ・最後のレポートは自分のキャリアアップ計画 (今後の学習計画) を書かせる

授業科目名 自然災害における介護・予防（SEE班（C班））

開講学年： 3 年 開講学期： 前期 単位数： 2 単位 開講形態： 講義・実習

【授業概要】

- テーマ
自然災害における介護予防
- ねらい
 - ・ 自然災害に対応できる人材を育成する
 - ・ 自然災害時の地域支援のコーディネートができる
 - ・ 実習を通して、学生が自然災害時の地域支援方法について学ぶことができる
- 目標
 - 1) 学生が日本の自然災害について理解し、災害状況にあった支援をコーディネートができる
 - 2) 高齢者の特性について理解し、介護予防の指導とコーディネートができる
- キーワード
地域支援、自然災害、介護予防、コーディネート

【授業計画】

- 授業の方法
 - 1～2 コマ：自然災害の歴史と概要について講義する
 - 3～4 コマ：環境変化による身体的・精神的な変化
 - 5～6 コマ：行政区と学生との実習準備・講演・ニーズの把握
 - 7～12 コマ：実習
 - 13～14 コマ：実習のまとめ、発表
 - 15 コマ：
- 日程
 - 1 自然災害の歴史と概要
 - 2 自然災害の各論（地震・津波・洪水）と地域特性
 - 3 自然災害における環境による身体的変化
 - 4 自然災害における環境による精神的変化
 - 5 行政区長から震災についてのゲストスピーチ
 - 6 実習準備、実習オリエンテーション
 - 7
| 実習 震災現場、各行政区、仮設住宅、高齢者施設
 - 12
 - 13 学習のまとめ、ふりかえり
 - 14 学生のプレゼンテーション
 - 15 レポートの提出、教員からのまとめ

【学習の方法】

- 受講のあり方
実際の震災後の地域支援を実践的に行う授業なので、受身ではなく積極的に参加して欲しい
- 予習のあり方

実際に震災にあった地域の特性、地理的状況について事前学習をしておくこと

- 復習のあり方

2年生で学んだ高齢者の特性（身体的、精神的）について、および介護予防の実践方法について復習しておくこと

【成績評価の方法】

- 成績評価基準

出席、レポート、実習の参加状況、実習態度

- 方法

学生に自己評価させ、途中途中の到達度を確認させ、その評価表を最後に提出してもらう

【科目の位置付け】

専門科目

【その他】

- 学生へのメッセージ

地域支援のコーディネート方法について積極的に学んで欲しい

- 履修に当たっての留意点

実習を欠席した場合に補充実習をおこなう

授業科目名 国際交流演習(どんまい班 (D班))

開講学年： 1 年 開講学期： 後 期 単位数： 2 単位 開講形態： 演習

【授業概要】

- テーマ

国際性を培うための実践的授業

- ねらい

将来、社会に出た時には、外国人とも人的ネットワークを築く必要がある。そのために、他国の文化を理解すると同時に自国についての理解を深め“日本人として”外国人とコミュニケーションをとれるようにする。

- 目標

・各国の文化・風土・生活習慣等を理解して、外国人と対等にコミュニケーションを取ることができる能力を身につける

・自分が住む地域・国について文化等を整理して外国人に伝え、理解してもらえる能力を身につける

- キーワード

異文化コミュニケーション、国際理解

【授業計画】

- 授業の方法

①イントロダクション（文化の違い等を例示して説明、ゲストを招いた講義）

②文化的な調査（グループ毎）→プレゼンテーション、討論

③実践・実習〔環境ボランティア、観光マップ作り〕→成果発表、討論

- 日程

1回目 ガイダンス、イントロダクション

2～3回目 ゲストスピーカーによる自国の紹介（2回目は欧米、3回目はアジア）

4回目 4グループ（5人1組）に分けて調査対象の区にを選ぶ
調査テーマについてグループ討論

- 5回目 調査してもらった内容についての話し合い
 6～7回目 調査報告プレゼンテーション、レポート提出（個人）
 〈 6回目：欧米国について（ゲストも招いて討論）
 7回目：アジアの国について（ゲスト招いて討論）
 8回目 自国について学ぶ
 9回目 地域について学ぶ
 10回目 地元の4地域を選ぶ 学生は4グループに分かれて担当地域を決定
 11～13回目 調べた内容の中間発表（11回目）
 〈 実習ボランティア 〈 観光ボランティア ※可能であれば役所の観光課とも連携
 観光マップ作り
 14～15回目 成果発表（グループ毎）、レポート提出（個人）

【成績評価の方法】

- 成績評価基準
 - ・グループ発表（3回）
 - ・個人レポート（2回）
- 方法

グループ発表	教員・学生・ゲストスピーカーによる評価
個人レポート	教員による評価

【科目の位置付け】

発展

授業科目名 震災後の21世紀パラダイム転換の提案 （ミルキーウェイ班（E班））

開講学年： 1 年 開講学期： 後 期 単位数： 2 単位 開講形態： 演習

【授業概要】

- テーマ
震災後の21世紀パラダイム転換の提案
- ねらい
21世紀の諸問題に対応できる基礎力の育成
- 目標
 - 1 学生は自ら問題を発見し、解決策を提案・実行し評価できるようになる
 - 2 （1）問題を発見することができるようになる
（2）守破離ができるようになる
（3）コミュニケーション・対話ができるようになる
 - 3 自分の意見を客観視できるようになる
- キーワード
循環再生型社会、環境、経済、原子力

【授業計画】

- 授業の方法
 - 1 講義
 - 2 グループ討論（ディベート）
 - 3 自習

- 日程
 - 1－2回 問題発見
 - 3－4回 他人の意見を理解する（講義）
 - 5－7回 グループ討議
 - 8－10回 地域：政府与党への提言書をつくる
 - 11－13回 イベント 地域社会への討論会
 - 14 回 評価
 - 15 回 まとめ

【学習の方法】

- 予習のあり方
 - 各自テーマについて調べ、まとめる

【成績評価の方法】

- 成績評価基準 (グループ他の学生)

外部評価	自己評価	他者評価	教員
25%	15%	15%	25%
	+	+	
	10%	10%	

授業科目名 心の理学療法セミナー(チーム・ボルト班 (F班))

開講学年： 1 年 開講学期： 後 期 単位数： 2 単位 開講形態： 演習

【授業概要】

- テーマ
 - 人間理解に通じる理学療法
- ねらい
 - 理学療法を通して人間の心と体の関係について深く理解する
- 目標
 - ①理学療法の検査技術得を取得する
 - ②患者を疾患、生活や家族の背景などから理解し、説明する
 - ③理学療法を超えて、深く人間を理解し表現する
- キーワード
 - 理学療法、人間観、職業意識、労働意欲

【授業計画】

- 授業の方法
 - 学生中心で役割分担し、グループ学習やプレゼンテーションを行う。深い人間理解に資するためリレー形式の講義も取り入れる

- 日程

1回 ガイダンス

2～5回 講義（生理学、文学、芸術、死生観）

6～9回 実習（検査、測定法）

10～14回 グループ討議とプレゼンテーション

15回 振り返り（自分の変容と人間理解—職業意識と労働意欲に対して—）

【学習の方法】

- 受講のあり方

主体的な受講をもとめる

- 予習のあり方

文学作品を読み 〽 各自授業に臨むこと
芸術作品を鑑賞し

- 復習のあり方

毎回の授業を各自振り返りレポート等に取り組むこと

【成績評価の方法】

- 成績評価基準

検査測定技術の習得 40%

患者理解 20%

人間理解 40%

- 方法

実習の技術（観察）

プレゼンテーションの形式と内容

自己評価と最終レポート

【その他】

- 学生へのメッセージ

理学療法を超える！！

◇グループ作業記録 プログラムⅣ 全体討議記録◇

A : 「冷蔵庫から社会を知る」 冷蔵庫の中身を通して課題発見、解決
講義：仕組み等の知識 ・ A班の教員で実践してみる
調査、発表
評価：レポート（小、全体）

B : 「君は大学で何を学ぶのか？」 社会の気付かない知の創造
目標：現場を見て言語化する、4年間の学習計画を立てられる
足りない能力に気付く →
創造的な学習方法を学ぶ
評価：レポート、プレゼン
・教員が4年間チュータとなる

C : 「自然災害後の介護予防」
講義：災害、コーディネートについて
実習：現場、仮設住宅
ねらい：自然災害とコーディネート
評価：出席、レポート、学生による自己評価
・震災後の状況
・さむい、人間関係、交通の変化
→身体に影響
・日本人はコーディネーターが弱い

D : 「国際交流演習」
テーマ：国際性を培う
講義：欧米、アジアの国について
演習：マップの作成、プレゼン

E : 「震災後の21世紀パラダイム転換の提案」
ねらい：問題の発見、解決、自分の意見を客観視できる
・評価主体は学習プロセス自体
・最終では外部評価を入れる

F : 「こころの理学療法」
ねらい：人間のこころと身体を理解
目標：技術、人間の理解
日程：ガイダンス、講義、実習、プレゼン
実際に患者にふれる
・予習では文芸作品を読む
・芸術家の輩出
○文学はすごい物
・人間の心の理解
・表現活動の必然性
○「理解」についてはプレゼンの出来で評価
○文学は直接的な治療ではない
・「ホスピタスアート」
・他にミュージックセラピー
アニマルセラピー

【第2チーム】FD合宿セミナープログラム及び記録

○プログラム抜粋

FD合宿セミナーに当たって

山形大学では、平成13年度よりこの合宿セミナーを実施し、教養教育の目標や授業の企画、シラバス作成を通して授業のスキル向上を実現するとともに、学部間の人的交流の拡大・充実を図ってまいりました。このような基盤のうえに、さらに「授業改善」に焦点化したアドバンスプログラムを実施することになりました。

このセミナーの第一の目的は、「個人個人の教員が教育者としての自己認識の深まりと学生の学びを大切にす授業、および授業改善の方法を具体的なケースを交えて考察・議論し、学生を中心とする教育・授業を発展させること」です。この目的を達成するために、本セミナーでは4つの参加型ワークショップを行います。これにより、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することにもなります。

また、「ワークショップを共通の題材として、学部間の人的交流の拡大・充実を図ること」が第二の目的です。他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後は、参加者が大学の教育分野全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナーは、「構成員こそが大学の財産」という精神でのぞんでいます。

更に、このセミナーはFDネットワーク“つばさ”の参加校を始めとして、全国の大学等に開かれています。他機関からの参加者にとりましても、本セミナーで学んだことは自校の教育の発展に活用することができるとともに、参加者がそれぞれの大学等の財産となる、さらにはそれが我が国全体の財産となるという精神でのぞんでいます。本セミナーが、相互研鑽の精神に則り、参加された大学・短大・高専の発展に寄与されんことを願っております。



第11回 山形大学FD合宿セミナー日程表

期 間 第2チーム：8月30日（火）～31日（水）

○第1日目

時 刻	項 目	担 当	参照ページ
12:45	JR山形駅西口集合・受付	事 務	
13:00	送迎バス 大学出発		
14:00	会場到着・記念撮影 セミナー開会 開会のあいさつ	司会：杉原	
14:30	オリエンテーション	杉原	P. 6 参照
14:40～15:10	アイスブレイク	田実	P. 9 参照
15:10～16:50	プログラムⅠ「学生が求める授業とは？－大学教員の 美しき誤解－」	田実	P. 9 参照
16:50～17:00	休憩（10分間）		
17:00～18:10	プログラムⅡ「学生のニーズに応える授業力とは？－ インタラクティブな授業－」	田実	P. 11参照
18:10～19:00	夕食（その後お風呂・休憩）		
19:00～20:00	入浴・休憩		
20:00～22:00	懇親会		
22:00	中締め		
23:00	就寝		

○第2日目

時 刻	項 目	担 当	参照ページ
7:30～	朝食・部屋退出		
8:30～10:00	プログラムⅢ「授業力の向上－わかりやすい授業を 実現するために－」	大島	P. 13参照
10:00～10:10	休憩（10分間）		
10:10～11:40	プログラムⅣ「研修のふりかえりとまとめ」	大島	P. 17参照
11:40～	修了式（ポストアンケート）	司会：杉原	
12:20～	昼食		
13:10	送迎バス 蔵王山寮出発		
15:00頃	山形駅経由 大学到着 解散		

【留意事項】

- セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。
- セミナー期間中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。
- 食事はセルフサービスとなります。食事時間になりましたら、共同で配膳作業等を行ってください。
- 起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓し、使用した宿泊室・廊下等を清掃してください。
- 退出の際は、使用したシーツ・枕カバーをたたんで、指定する場所に返却してください。

8月30日 第2チーム（1日目）

DR-A	田実 潔
DR-B	大島 武

A班	氏名	性別
山地	宮崎 昭	男
山工	山本 修	男
山基	貞包 英之	男
愛知	牧 恵子	女
苫小牧	伊藤 勝久	男
東医	太田 正人	男

B班	氏名	性別
山工	Mikael A Langthjem	男
山農	渡辺 理恵	女
山地	佐々木 究	男
昭和	戸田 潤	男
大同	酒井 陽一	男

C班	氏名	性別
山地	野々山 信二	男
山工	武田 利浩	男
山理	並河 英紀	男
東洋	梅山 香代子	女
岡山	滝澤 昇	男

D班	氏名	性別
山工	近藤 康雄	男
山農	保木本 利行	男
山地	新海 宏成	男
京都	有本 収	男
福島	松江 俊一	男
了徳寺	越田 専太郎	男

E班	氏名	性別
山地	永井 康雄	男
山工	田中 賢	男
山理	奥野 貴士	男
東福	高村 元章	男
苫小牧	蓑島 栄紀	男

F班	氏名	性別
山地	三辻 和弥	男
山工	杉本 昌隆	男
北翔	島津 彰	男
了徳寺	川村 真由美	女
修紅	白石 雅紀	男

山人：山形大学人文学部 山地：山形大学地域教育文化学部 山理：山形大学理学部
 山工：山形大学工学部 山農：山形大学農学部 山基：山形大学基盤教育院
 愛知：愛知東邦大学 苫小牧：苫小牧駒澤大学 東医：東京医科歯科大学 昭和：昭和薬科大学
 大同：大同大学 岡山：岡山理科大学 東洋：東洋学園大学 了徳寺：了徳寺大学
 京都：京都薬科大学 福島：福島工業高等専門学校 東福：東北福祉大学
 修紅：修紅短期大学 北翔：北翔大学

8月31日 第2チーム (2日目)

DR-A	田実 潔
DR-B	大島 武

A班	氏名	性別
山基	貞包 英之	男
山工	杉本 昌隆	男
山地	永井 康雄	男
了徳寺	越田 専太郎	男
東洋	梅山 香代子	女
大同	酒井 陽一	男

B班	氏名	性別
山地	三辻 和弥	男
山工	山本 修	男
山農	渡辺 理恵	女
東福	高村 元章	男
京都	有本 收	男

C班	氏名	性別
山理	並河 英紀	男
山工	Mikael A Langthjem	男
山地	宮崎 昭	男
修紅	白石 雅紀	男
福島	松江 俊一	男

D班	氏名	性別
山地	佐々木 究	男
山農	保木本 利行	男
山工	武田 利浩	男
了徳寺	川村 真由美	女
東医	太田 正人	男
苫小牧	蓑島 栄紀	男

E班	氏名	性別
山理	奥野 貴士	男
山工	近藤 康雄	男
山地	野々山 信二	男
北翔	島津 彰	男
愛知	牧 恵子	女

F班	氏名	性別
山工	田中 賢	男
山地	新海 宏成	男
岡山	滝澤 昇	男
昭和	戸田 潤	男
苫小牧	伊藤 勝久	男

山人:山形大学人文学部 山地:山形大学地域教育文化学部 山理:山形大学理学部
 山工:山形大学工学部 山農:山形大学農学部 山基:山形大学基盤教育院
 愛知:愛知東邦大学 苫小牧:苫小牧駒澤大学 東医:東京医科歯科大学 昭和:昭和薬科大学
 大同:大同大学 岡山:岡山理科大学 東洋:東洋学園大学 了徳寺:了徳寺大学
 京都:京都薬科大学 福島:福島工業高等専門学校 東福:東北福祉大学
 修紅:修紅短期大学 北翔:北翔大学

オリエンテーション

1 FDの必要性

- ① 大学の社会的教育責務の明確化。
- ② 大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革。
- ③ 大学生の質の変化への対応。

2 合宿セミナーの目的

- ① 教員個人が大学を支えること的位置付け。
- ② 学生一人ひとりの発達と同様に教員一人ひとりが同僚の力を得て発達することを改めて確認する。
- ③ 教授法について共に考え、スキルアップする。
- ④ 教員相互の交流。

3 セミナー形態

体験型のセミナーで、セミナー自体がグループ学習形式であり、参加者は、学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② セミナーのグループ構成：6班
「プログラムⅠ・Ⅱ」（1日目）と「プログラムⅢ・Ⅳ」（2日目）で、班構成を替えます。
- ③ プログラムによっては、全体での発表の際に記録をとるための記録係を置く場合があります。また、グループワークにおいて、各班に、司会者、記録係等を置く場合もあります。
- ④ 「③」で記録したものは、各プログラム終了後に提出していただきます（この記録は、こちらでコピーした後、速やかに全班に配付します）。
- ⑥ 最終日に合宿セミナーに関するポストアンケートを実施します。

プログラムⅠ「学生が求める授業とは？－大学教員の美しき誤解－」

ここでの課題

プログラムⅠ「学生が求める授業とは？－大学教員の美しき誤解」では、まずいくつかのデータをお示ししたいと思います。それを基に、学生参加型授業の大切な（と勝手に私が思っている）構成要素である学生の大学授業に対する意識を明確にし、大学教員との意識のギャップを皆さんで考える時間にします。

その上で、後半は参会者の皆さんの授業実践を持ち寄り、共有することにします。他の人の実践には必ず学ぶべき点があるように思います。自分では気づかなかった点でも、実践を交換するうちに、気づかされたり指摘されたりすることもあります。良い点を見つけ合いましょう。

- | | |
|-----------------|-----|
| ○ プログラムの講師による講義 | 60分 |
| ○ 作業内容の説明 | 5分 |
| ○ グループでの協議・プレゼン | 10分 |
| ○ グループでの選択協議 | 5分 |
| ○ 各グループ発表 | 20分 |

全体で 100分

プログラムⅡ「学生のニーズに応える授業力とは？ーインタラクティブな授業ー」

ここでの課題

プログラムⅡでは、コミュニケーションに課題のある発達障害のある人への支援や研究から、インタラクティブ(相互交流)のある授業作り(とても簡単なことです)について、いくつかの知見をご紹介します。その上で、予め用意された授業課題について、数人の参会者の方にプレゼン(模擬授業)をして頂きます。学生役の皆さんを含めた意見交流から、インタラクティブな授業について、議論ができたかと考えています。

- インタラクティブな授業のヒントの説明 10分
 - グループごとに与えられた題材について討論 10分
 - プレゼン前の打ち合わせ 5分
 - プレゼン 20分(10分×2)
 - まとめと質疑応答 15分
- 全体で60分

プログラムⅢ「授業力の向上ーわかりやすい授業を実現するためにー」

ここでの課題

プログラムⅠ～Ⅱで検討した学生のモチベーション向上、授業への参画を実現するためには、まず教える教員自身に指導力・授業力が求められます。「わかりやすい」「興味の湧く」授業を実現するにはどうしたらいいのか。このセッションでは、授業スキルの向上という基本に立ち返り、講師の体験に基づく講義をベースにディスカッション形式で考えを深めます。

- プログラムの講師による内容の説明 5分
 - 「授業力向上のためにはーケーススタディー」 55分
→次頁のレジュメにそった講義
 - 「よりよい授業を目指してーディスカッションー」 30分
→講義内容を踏まえ、よりよい授業を実現するためのポイントを整理する。
→自分の持っている問題点の洗い出しと解決策の模索を行う。
- 全体で90分

【ケーススタディーー私の授業法ー】

1. ガイダンスのしかた

- 必ずワンペーパー作って渡す。 ← 最初の3週間で徹底

2. 授業の組み立て方

- 90分を3つのパートにわけると ← 話しの構造化
- 時間の使い方を予告し、守る。 ← 全体像を見せることが大切
- 「つかみ」が大切(冒頭に力をいれる) ← 終わりはすっきり

3. 効果的な表現技術

- 言語表現の工夫
 - ・ 「例示」の多用 ← 相手に合った例を挙げる
 - ・ 「つなぎ言葉」の活用 ← ゆっくり間を取って話す
 - ・ 「用語」の選択と位置付け ← 新出語に注意
- 非言語表現の効果
 - ・ 身体表現 ← gesture と posture の使い分け
 - ・ 対人距離 ← 机間巡視/指導はどこまで有効か

- ・表情 ← 笑顔が基本（好意の返報性）
 - ・アイコンタクト ← プレッシャーと激励
4. 資料配付と板書
- 教科書の使い方 ← 買わせたら使う／使わないなら買わせない
 - レジユメの効果 ← 情報を与えすぎない
 - 板書は最高のビジュアル ← 小学校時代からのお約束
5. 双方向性の確保
- 発問のしかた（3つのポイント） ← 大切なのはリズム
 - 紙ベースでのやりとり ← e x) 大手前短大「なるほどポイント」
6. 評価のしかた
- 「合わせ技」が基本 ← e x) 出席 10% リスニング 10%
小テスト 40%
プレゼン 20% 解答・提出物 20%
 - 主観と客観のバランス ← 学生が納得できる基準を明示する
(妥当性・客観性・効率性)
 - 個人情報保護と説明責任 ← 授業期間と終了後で区別

プログラムIV「研修のふりかえりとまとめ」

ここでの課題

プログラムIIIで議論，検討したより良い授業を実現するためのポイントについて，各グループに発表していただき，全体での分かち合いを行います。また，2日間の研修を通じて，自分のコミュニケーションスタイルが他人にどんな印象を与えたのか，イメージ交換ゲームを通じてふりかえります。

- プログラムIVの検討結果のプレゼン 5分 x 6班 30分
- イメージ交換ゲームの実施 30分
- イメージ交換ゲームのふりかえり 15分
- 研修全体のまとめ -学びをFDに生かしていきましょう- 20分
全体で90分

プログラム I

「学生が求める授業とは？—大学教員の美しき誤解—」



プログラムⅡ

「学生のニーズに応える授業力とは？—インタラクティブな授業—」



プログラムⅢ 記録

「授業力の向上ーわかりやすい授業を実現するためにー」

B班

- 1 学力にばらつきのある場合
どの学生をターゲットに授業を進めるか？
→やる気・能力のある学生を中心に、そうでない学生には別メニュー・補講などで対応
- 2 学生に授業内容の理解をどうやって確認するか？
→演習問題や小テスト
- 3 板書の効用について

C班

- 1 特定の学生を見ると不公平感が生まれるのではないか
→動き回って色々な見え方がするようにする
- 2 寝てしまう学生の対処
→書く作業をさせる 空白欄のあるレジュメ等の利用
- 3 携帯・内職・私語
→授業と関係ない作業なので「外でやって下さい」と言う

D班

- 1 ついてこられない学生をどうするか？
→・最低レベルを決めて補習する
・TAを付ける
- 2 色んなバックグラウンドの学生が混在する場合の評価
→・最初に学生の要求を調べる
・シャトルカードの利用
- 3 教科書や配布物の活用ができない学生
→・テストで自分でまとめたA4の紙1枚を持ち込み可にする
紙は回収して授業の参考にする
・資料に空白を作っておいて学生に記入させる

E班

- 1 板書とスライドの使い分け、バランス
→・構成を考える（スライド時間、板書時間）
 - ・教室環境の改善
- 2 授業時間外学習を学生が行わない
→・レポート・テストにより点数化する
 - ・評価に反映させる
- 3 教科書の使い方が難しい場合がある（自作でない限り）
→皆様アイデアをお願いします

F班

- 1 授業の雰囲気はどう作り上げるか
→・少人数から大人数へ
 - ・90分の最初にアイスブレイキング
- 2 シラバスをどこまで厳守するか
→・学生が読まないことを前提
 - ・変更があればそのつど学生に伝える（web）
- 3 発達障害の学生に対する対応
授業妨害 →・授業後に対応
 - ・対応時間を事前にはっきり告げる



プログラムⅣ 「研修のふりかえりとまとめ」

